

■ 書 評 ■

潮木守一著

『京都帝国大学の挑戦』

国立民族学博物館 園 田 英 弘

『京都帝国大学の挑戦』（以下『挑戦』と略す）という刺激的タイトルの本が出た。もしも、著者が京大関係者であったならば、とても気恥ずかしくて、このような命名はできなかったであろうが、さといわいなことに『挑戦』の著者潮木守一氏は、京大と縁もゆかりもないだけに、ためらいなしにこのようなタイトルを選べたのであろう。

『挑戦』は決してキワモノ的な本ではない。『教育社会学研究』を読もうというほどの人で、潮木氏を知らない人もないであろうから、ここでは『挑戦』が東大出身の名大教授によって、純粋学術的な動機にもとづいて書かれたものであり、名古屋大学出版の第一号の出版物であることを指摘するだけにしておこう。

また、この学界のかくれもなき大家である潮木氏の力作を、後進の私が「水準を越えた、素晴らしい本です」などといわずもがなのことを繰り返す愚（あるいは非礼）を犯すつもりはないので、以下の論評はあえて『挑戦』のもつ弱点にできるかぎり議論を集中させるつもりであることを、あらかじめことわっておきたい。いわば、『挑戦』に対する後進の者からの「挑戦」である。

『挑戦』の魅力と弱点は、この本が『京都帝国大学の挑戦』というタイトルをもったところにあった。いったい、人が本や論文を書こうとするとき、タイトルが先にあるのか、それともタイトルとは、出来あがった文章に適当にそれらしきものを付したにすぎないものであろうか。従来潮木氏は、明らかに後者のタイプに属していた。論文集である『学歴

社会の転換』はもちろん、書き下ろしの『近代大学の形成と変容』や『大学と社会』などのタイトルは、きわめてぶっきらぼうで、没個性的なものとなっている。そこには、コソコソとデータを集め、大きな時代の流れや社会の変化を地道に、骨太に描き出そうとする静かなアカデミシヤンの姿がある。

ところが、『挑戦』には、これまでの潮木氏と異なる熱気がみられ、きわめて個性的・挑戦的なタイトルが、そのことをなによりもよく表している。一体、潮木氏に何が生じたのか。著者の思考の道筋を、私なりに再構成してみよう。

『挑戦』は二つのテーマをもつ。第一は「後発京都大学が先発東京大学に対して試みた挑戦とは何であったか」であり、第二は「明治三十年代の日本におけるドイツ・モデルの受容はどのようなかたちで展開されたのか」と、いうものであった。『挑戦』の「あとがき」からも明らかのように、第二のテーマである「ドイツ・モデルの受容」（潮木氏の別の表現を用いれば「ジャーマン・インパクト」）こそは、著者のここ数年来のテーマであり、既に19世紀のアメリカの大学のケース・スタディーである『大学と社会』が、出版されている。つまり、『挑戦』は最初は「ジャーマン・インパクト」の日本版の研究として出発したということである。これは勝手な私の臆測ではなく、『挑戦』の構成をみても、問題提起をした第1章について、「明治30年代の大学改革論」（第2章）・「モデルとしてのドイツ大学」（第3章）・「帝国大学の教育システム」（第4章）なども、日本における

「ジャーマン・インパクト」について論究しているのである。

さらに京大の東大に対する「挑戦」を直接的に取り扱った「東西両京の大学の競争」（第5章）・「改革の挫折」（第6章）は、前半で提出された日本における「ジャーマン・インパクト」の具体的な展開を分析したかたちになっている。そこで問題点は、次のようになるであろう。はたして、京大の東大に対する明治30年代の「挑戦」は、日本における「ジャーマン・インパクト」というテーマの中にうまく包摂されているかどうか。言い換えれば、京大の東大に対する「挑戦」はその本質的な部分で、「ジャーマン・インパクト」の日本的事例たりえているかということである。

このことを、もう少し突っ込んで議論するためには、「ジャーマン・インパクト」とは何かということ、明確にしなければならない。『大学と社会』によれば、大学は本来的には、十代後半の子供を「教育」するための施設であった。大学が大人の「研究」の場という性格を持ち始めるのは、19世紀のことである。大学のもつ根本的性格に「研究」というものが加わるのに対応して、大学での「教育」のありかたや、大学教師のアイデンティティーや大学の機構そのものなどにさまざまな変化が生じてくるが、この変化の過程をたんに、抽象的に「教育」から「研究」への重点の移行として論じないで、研究機能を世界に先がけて持ちはじめたドイツの大学の影響という媒介項を入れることによって、よりヴィヴィッドに、より具体的に、潮木氏は描こうとした。「ジャーマン・インパクト」とは、19世紀に世界的規模で生じた大学の変革を分析するためのフレームワークであった。

著者は、このような視点の具体的歴史解釈への適用には、非常に慎重である。ドイツの大学の影響が各国へ一律的ではなかったのはもちろん、アメリカ内におい

てすら、ドイツ・モデルの導入者たちが、ドイツの大学のどの部分に力点を置いて理解するかによって、その影響のありかたは大きく異なっていると指摘する。詳細は『大学と社会』をみていただくしかないが、『教育社会学』の編集部より、この本に対する論評もするよう依頼されているので（本来なら『大学と社会』は、ちゃんとこの1冊を正面に据えて書評すべき価値のものである）、私の考えを記しておけば、タイトルの悪さ、現代の大学教師に対するアテコスリ風のお遊びの部分をしり引いても、傑作である。日本には、アメリカ大学史の研究が意外に少ないが、この本によってアメリカの大学に対するわれわれの認識に厚みがもたらされただけではなく、分析的大学史研究がこれほど面白い知的対象だということを、『大学と社会』は私に教えてくれた（このことについては近々、園田英弘「E・S・モースとイングランドの知的環境」守屋毅編『E・S・モース研究』小学館として出版される予定）。また、「ジャーマン・インパクト」の事例研究としても、後ほど述べる理由からして、『挑戦』よりも成功していると思う。

さて、日本のドイツ・モデル導入者は、ドイツの大学のどの部分に着目したのか。潮木氏は、以前、帝国大学のモデルはドイツの大学ではなかったことを明言している。このような意見は、現在では定説といってもよいと思われるが、その潮木氏がドイツ大学モデルの日本への導入を問題にしているのである。この部分の切れあじは鋭い。曰く「帝国大学の制度的組織・形態面に焦点をしばっている限り、モデル探しはそれなりの制約をもっていた」。しかし「帝国大学の教育組織という次元に焦点を当てた場合には、もっと異なった局面が開かれるはずである。」「教育組織」という言葉を教育のための制度の運用というものに置き換えれば、事態はもっとはっきりするかもしれない。「ジャーマン・インパクト」

は帝国大学の組織・機構というレベルにではなく、そのような制度的枠組を前提としていた、大学の運用のレベルに生じた。潮木氏のこの着目は、『挑戦』の中心的命題である。そして、後発の大学として京都帝大は、先発の東京帝大と異なる「教育組織」を採用したとする。それは、科目の選択自由制・ゼミナール・卒業論文など、自立的な思考を育て、「自立的な探究心を養うこと」を目的とした、ドイツの大学の教育の方法であった。新生京都帝大は、東大型のつめ込み教育型ではなく、「研究」により重点を置く教育方針を採用した。このような新しい方法にもとづいて、京大は東大に「挑戦」したと潮木氏は説く。

『挑戦』の後半の部分は、こうしてなされた京大の東大に対する「挑戦」とその「挫折」を、推理小説じつたての読み物として、われわれに提供されている。明治32年にドイツ風の「教育組織」を採用した京大は、明治40年5月に東大型のつめ込み教育に復帰する。このような改正を強いた犯人は誰か。推理小説の解説はヤボというものだ。高文試験の成績・入学者の高等学校における成績・私学や議会の対応、そして、京大方式採用の中心的人物となった人々の辞職など、潮木氏の手なみはあざやかである。あざやかであるだけに、この面白すぎる明治40年前後の京大で生じた活劇に、潮木氏が最初もっていた構想、すなわち日本におけるジャーマン・インパクトという視点全体が引きずられ過ぎてはいないであろうかと私は考えるのである。歴史的事件を深く集中的に分析することは、ともすれば、そのような分析を位置づけていた全体の枠組から、具体的な歴史分析が逸脱してしまうことになりがちである。潮木氏は、京大の東大に対する「挑戦」の研究に成功することによって、「ジャーマン・インパクト」の研究を「挫折」させてしまっていると思う。

私の『挑戦』に対する最大の不満は、

著者が京大法科大学の東大法科大学への「挑戦」の分析に終始しているという点にある。私はナイモノネダリをしているのではない。潮木氏が、他の学部ではなく法科大学を分析の対象に選んだ理由はなんだろうか。この点、著者は、黙して語らない。法科大学での実験は、他の学部での試みを代表しているのであろうか。そして、京大法科大学の「挫折」は他の学部の、ひいては京大全体の「挫折」を意味するのであるか。このような疑問は続々に湧いてくる。潮木氏は、京都帝国大学の「挑戦」を描くための最も重要な論点をネグレクトしている。

だが、それはいい。タイトルにそれほど重きを置かないクセのある潮木氏が便宜的につけたのかもしれないタイトルにそれほど思い入れをしなくてもよい。潮木氏はたまたま、京大法科大学に関心があり、その分析結果に『京都帝国大学の挑戦』という一般的な名前をつけたにすぎないでしょう。そうすると、次のわれわれの論点は、「ジャーマン・インパクト」の事例研究として、法科大学ははたして適切であるかどうかということである。著者自身が明言しているように、「法科大学の役割はとりもなおさず有能な官僚を養成すること」であるが、このようなプロフェッショナル・スクールで、「研究」が「教育」以上に重視される、あるいは、「研究」を志向するような「教育」が主流となる可能性があるであろうか。

明治32年の京大法科大学の教育規則改正を推進したドイツ帰りには、法科大学というものに対する錯覚があったのではないか。なるほど、彼らは研究者であつたろう。しかし、プロフェッショナル・スクールの教師は研究者である以上に教育者である宿命をもつのではないか。「有能な官僚を養成」するためには、なによりもまず自分たちの教え子が「官僚」になる必要があつたのではないか。「有能な官僚」を養成するためには、京大型の

「教育」が望ましかったとしよう。官僚になるためには、しかしながら、高等文官試験に合格しなければならない。高文試験とは競争試験である。高文試験はそのままにして、その試験にそなえるための「教育」だけを、ライバルと異なる高踏的「教育」に変えてしまったら、結果がどのようなになるか、あまりにも明らかではないか。それは「悲劇」ではなく喜劇ではないか。平和な時代のパンゼイ突撃ともいうべく、支配のための技術学ともいうべき法律の専門家が、このような現実遊離の姿勢ではたしてよいのかと、心配になる。

繰り返すが、法科大学の教師は研究者である以上に、教育者でなければならない。そして、プロフェッショナル・スクールにおける良き教師とは、学生をその道のプロフェッショナルにするべく適切に教育・訓練する者以外にはありえない。過去も現在も、このようなプロフェッショナル・スクールの性格は不変のはずである。しかも、「古代的プロフェッション」と呼ばれる法律家のよって立つ法律学は、医学などと異なり、科学革命の影響をもっとも少なく受けた学問分野であった。研究のための研究という時代的風潮をうけて、法科大学の「研究」や「教育」のありかたにある種の変化が生じたことは理解できるが、それは根本的变化ではない。そこでの学問を一変し、そこでの教育・訓練を大転換させるような変化ではない。

ところが、「ジャーマン・インパクト」という問題意識の背景にあるのは、「教育」よりも「研究」というものが一つの学問のレーゾン・デートルになるような、学問内容とそれを支える人々の意識の一大転換を視野に入れたものであったはずである。潮木氏はなぜ、高文試験の合格者数などが最後にはものをいう法科大学などではなく、「研究」というものがもっと直接的にものをいう理学部や文学部を比較検討しなかったのであろうか。潮

木氏は、たまたま法科大学の分析に関心をもったかもしれないが、法科大学は「ジャーマン・インパクト」の事例研究としては最も不適切な対象だったのではあるまいか。著者のいう二つのテーマはうまくかみ合っていないというのが私の評価である。「ジャーマン・インパクト」という帝国大学史にとって最大級に重要な問題が、斬馬剣禅の『東西両京之大学』にひきずられて、明治30年代の大学活劇に解消されているのを、潮木氏のためにおしむ。

「研究」の府としての帝国大学は、京大創設後、どのような競合状態にあったのか。新生の京大は、他の学部においても、東大の「軍門」に下ったのか。既に、潮木氏と因縁浅からぬ中山茂氏は次のように指摘している。「選別や教育の世界ではなく、『研究』の面では、東京帝大が独占的地位にあるのではなく、かなり早くから八ヶ岳状になって来た」(『帝国大学の誕生』)。だとすると、京大や東北大の「挑戦」は「研究」水準に関するかぎり失敗ではなかったということになる。しかし、周知のように、そのような「研究」上の「八ヶ岳状」実績と大学間の富士山型の序列とは無関係のように並立している。それは一体なぜか。法科万能の時代にあって、法科大学の成否はその大学全体の威信にかかわると潮木氏は言いたいのだろうか。

最近の潮木氏には、「研究」の場としての大学に対する深い失望感がある。これこそが、大学が研究機能をもち始めた頃の「研究」に著者を駆り立てる原因であろう。だとすると、遅れてきたドイツ帰りの潮木氏の日本の大学の現状に対する「挑戦」こそが、『挑戦』の本質だと私は読んだ。それは、長年、潮木氏の文章の愛読者であることを自負する評者の、センチメンタルな深読みであろうか。

四六判 212 頁, 2000 円
名古屋大学出版会